

名城大学 経済・経営学会会報

No.34

『名城論叢』
第九巻 第二号 付録
二〇〇八年九月三〇日
名城大学 経済・経営学会 発行

シアトルにて

「ツアーバス」の光と陰

……山本雄吾

14

……大崎孝徳

1

シアトルにて

経営学部経営学科 大崎 孝徳

シアトルへ

カナダのバンクーバー経由でシアトルに向かう。シアトルへの日本からの直行便は成田からしか出ていない。イチローのおかげで日本におけるシアトルの知名度はかなり高くなっていると思われるが、所詮は北西の端っこの人口五〇万人の街であり、ニューヨークやロスアンゼルスやサンフランシスコのように簡単には行くことはできない。

昔なら間違いなく大韓航空を選択していた。料金が安く、時間的ロスがないからだ。それどころか成田に直行できる場合を除けば、韓国の仁川空港経由のほうが断然速い。私に限らず、最近、日本の地方空港から仁川空港経由でアジアや欧米に行く旅行者が増えてきていると聞くが、実にもっともなことである（頑張れ！ 日本の航空行政）。

しかし、近年、北周りということで人気が出すぎてしまい、価格が高騰してきているようだ。よって大きな経済的ベネフィットを享受しようと思えば、台北経由のようにかなりの遠回りが要求されるが、もはやそうしたことを実行する気力はなくなってしまうている。また、欧米系と比較し、アジア系の航空会社の座席はかなり幅、前ともに狭く、体力的にもきつい。よって、今回は欧米系の航空会社を選択し、また乗換後、三分程度のフライトで済むバンクーバー経由とした。

バンクーバーへのフライトでのお隣さんは神戸市外国語大学の女子大生だった。外大ということもあるだろうが、彼女は英会話を勉強するのではなく、英語教授法のディプロマを取得するためにバンクーバーに滞在することだった（立派だ）。

バンクーバーからシアトルへのフライトのお隣さんは韓国の大学生で、こちらは英会話の勉強のため、シアトルに滞在することだった。テレビでよく報道されているが、韓国における英語に対する意識が実際かなり高いことをその後のシアトル生活でも幾度となく感じた。

話は逸れるが、普段の生活において、お金がほしいと強く感じることはないのだが、唯一の例外が海外行きのフライトだ。ファーストクラスは初めから度外視するとして、ビジネスクラ

ちなみに彼は免許を持っていないため、自動車は運転できない。が、以前、軍隊でドイツ駐留時に戦車を運転するのが彼の任務だったらしく、その写真を自慢げに見せてくれた。早速、アメリカンジョーク? の洗礼を受けた。その後、部屋に入り、荷物を置き、疲れていたが、ただちにホテルを出た。つまり、そういう部屋だった。

とりあえず海が見たくなり、坂を下る。五分もしないうちに海に出た。ここはダウンタウンの北の端で、南にはいくつものピア(埠頭)があり、レストランや土産物屋などが入っており、賑やかなスポットになっている。一方、北には海岸線に沿い、雄大な公園が広がっていた。入口付近には、奇妙な(芸術的センスのない私にはそうとしか思えない)彫刻が立ち並んでいるが、奥に入ると特別なものは何もなく、海岸線ときれいに刈られた芝生、ぼつりぼつりと木が立っている。そんな公園で人々は寝たり、歩いたり、走ったりしている。個人個人が、黙々と、悠然と、ぼんやりと。もちろん、背景の違いということも影響しているだろうが、しみじみ異国にきたと感じる。私にとつて、彼らは間違いなく異人だ。日本の公園にいる人を表現するなら、せこせこ、きよろきよろ、そんな表現が適当なような気がする(もちろん私はその中の一人です)。

公園では、乳母車を押しながらジョギングしている人を多く見かけた。イメージしにくいかもしれないが、乳母車は前一輪後ろ二輪の計三輪、車輪は大きく、スポーティなモデルだ。それを押しながら全速力で走っているパパやママ。これが日本だったらどうなるだろう? おばさんの恐ろしい陰口が乱れ咲

くだろう。確かに、赤ちゃんはやや引きつっていたような気もしなくはないが(実際はあまりの速さに表情を確認できなかった)。

その後、靴を求め、ダウンタウンの中心部に移動する。ずいぶん前になるがシアトルには二度ほど来たことがあり、街の概要は把握できていた。それほど大きなダウンタウンではないため、徒歩でどこでも行くことができる(といっても、端から端まで四〇分程度はかかるが)。ただし、ダウンタウン内はバスが無料のため、一般的にはバスを利用する傾向が高いように思われる。中心部のモールに入る。地下にあるスニーカーの大手チェーンの店舗を目指す。と、意外なものが目に入ってきた。ダイソーの店舗だ。日本を離れ、いくつも経っていないが、妙に懐かしく、また研究の点からも興味深く早速、店に入る。店内は日本とあまり変わらないレイアウト、品ぞろえだった。残念ながら、客はまばらだった。しかも、ほとんどの客が不思議そうに、ややおどおどした様子で商品を手に入っていた。アメリカでのダイソーの業績は不明だが、ビジネスとして成功するにはまだしばらく時間がかかるのではないかと感じられた。価格は一・五ドル(当時のレートで一八〇円)だった。送料を考えれば適正な料金だろうが、一消費者としてはこの八〇円の差は非常に大きく感じられた。後日、日本人の主婦の方と話をする機会があったが、同じ感想を持っていた。ということで、当初、便利だ、大いに利用しようと思っていたものの、結局、購入したのは、爪切り、大根おろし、大学ノート、その程度にとどまった。後に風の噂で、ダイソーはアジア系米国人を中心に人気が

あると聞いた。

ダイソーでの寄り道を済ませ、靴屋に入る。シアトルは街のマスケットがナメクジというくらい、とにかく雨がが多い。夏は比較的、晴れ間が広がり、日本のような蒸し暑さもなく、快適そのものだが、秋から冬にかけて、とにかく雨だ。去年は二カ月ほど、毎日、雨が降り続いたとの噂も耳にした。私が過ごした一年は夏に雨がやや多かったものの、冬の雨はその分、少なめだった(幸か不幸か)。という気候に備え、雨が降ってもどうでもいい靴、できればあまり気持ち悪さを感じない靴を買うためにやってくる。早速、そうした靴を見つけ、試着するために店内のベンチに座る。横には生真面目そうな白人青年が試着し、それをこれまた生真面目そうなお父さんが見守っている。青年は靴を履き終えると、お父さんと何やら話し始め、急に店の外に駆け出してしまった。万引き？ さすがアメリカ大胆だなど思ったのも束の間、店の前で何度もジャンプをし始めた。その後、満足そうな顔で店内に戻り、靴を脱ぎ、レジに向かった。あいた口がふさがらない、まさにそんな感じだった。店員は何も気に留めている様子はなく、普通に接していた。私にとって、は到着初日にしてアメリカの奥深さを知るちょっとした事件だった。

その後、ホテルのフロントの青年のアドバイスに基づき、迷うことなく、安いけど遠いスーパーに買い出しに出かけた。サツポロ一番(たぶんチキン味)、リンゴ、玉子、ミネラルウォーターを買った。ミネラルウォーターは容量が大きいので重く、それを入れてあるビニール袋が手に食い込み、痛かった。シアトル



ハイウェイから見えるシアトルのダウンタウン

では水道水を飲むことに何も問題はない（むしろ、おいしい）と知るのに、その後、一カ月を要した。

こうした、初日の出来事はどれも些細なことだったが、異国初日の緊張を和らげるには十分に効果的だった。

到着二日目…いざ大学へ

はじめが肝心。早速、大学に向かう。道路の混雑状況にもよるが、ダウンタウンからバスで二〇―三〇分程度のところにワシントン大学、通称UW（ユーダブと発音されている）はある。街を知る、またアパート探しという目的も兼ね、歩いていくことにした。途中、空室の看板を見つけ、大家さんに部屋を見せてもらったこともあるが、大学まで二時間以上、かかってしまった。

大学の正門の前に立つ。何度来ても、敷地の壮大さ、歴史もある建造物、豊かな緑、リスの愛おしさ、どれも本当に心から感服してしまう。自然に大きな息がこぼれる。そんななか、大きな声では言えないが、私がお世話になったビジネススクールは実にみずばらしい。おそらく、三〇―四〇年前にその時代においては最先端の流行のスタイルで建てられたものと思われるが、今となってはただのコンクリートむき出しの汚いビルになりさがってしまった。それに比べ、石やレンガを基調とした歴史ある建物は古さがいい味になっている（おー、アカデミックという感じ）。近年、建てられているものは、こうした反省を踏まえてのことだろうが、従来の歴史ある建物同様のスタイル

で建てられている。ちなみに、ビジネススクールの図書館は近年建てられたものであるがレンガ造りの趣のある建物で、来年度から建設が始まるビジネススクールの新校舎も完成予想図を見る限り、同じトーンの建物となっている。

今回の在外研究の事務的サポートをしていたセクレタリーのパムさんを訪ねる。五〇歳前後のふっくらとした女性で日本から持ってきた扇子に大いに喜んでいただいた。早速、研究者カードの発行、メールアドレスの取得について説明を受ける。ちなみに、パムさんに「家電の安い店を知らないですか。」と尋ねたところ、「この前、彼氏と行った〇×店は安くいい店だった」と教えてくれた。彼氏の言葉に固まってしまった。いい国だ。この国でなら、三九歳（現在四〇歳）の私も肩身の狭い思いをすることなく、生きていけるのではないかと真剣に思った。

その後、私のスポンサーになっていたマック先生が在室中とのこと、ご挨拶に伺った。AMAというマーケティングの世界において最も権威ある学会の重鎮でもあり、もちろん偉い先生なのだが、お人柄も大変素晴らしく、その後、アパートは決まったか？ ホームパーティーに来ないか？ など、私のような者にお声かけいただき、公私ともにお世話になった。夏のホームパーティーでは度肝を抜かれた。まず二〇〇人に案内状を送付したと聞き、不思議な感覚に陥った。その後、場所を確認するため、グーグルマップで調べると、そこはゴルフコースに面した湖畔沿いだった。米国では（日本でもそうかもしれないが）、眺望というプレミアはかなり大きく価格に反映する



ワシントン大学 スザロー図書館

らしい。とりわけ、塩害などを気にせずに住む湖畔の場合、極めて高いという噂を耳にしていた。当日は、車で付近まで行けたものの、家の入口がどこかわからない。車を止め、茂みを下る。「甘味処」と漢字で書かれた木製の看板が目に入る。大いに混乱する。開けっぱなしの玄関のドアからパーティーらしき、雰囲気か漂ってくる。恐る恐る中に入るとマック先生の姿が目飛び込む。その後ろには高級リゾートホテルのような大きなガラス窓があり、サンセットで赤く染まる湖が視界一面に広がっている。「ハリウッドや！」それが私の第一声だった。とても現実の世界には思えず、映画の一場面としか受け入れられなかった。テーブルの上には豪華な食事（ケータリングであると思われる）、見たこともない楽器を奏でる黒人ミュージシャン（このパーティーのために雇われている）、大きな屋根付きプール、棧橋に浮かぶマイヨット、なにもかも信じられなかった。

大きく脱線してしまったが、大学初日の話に戻ろう。諸手続きを終え、驚くべき事実がわかった。中庭なども含め、学内中にワイアレスLANが行き渡っているということだ。日本のスクールで考えてはいけない。大雑把な喩ではあるが、塩釜口から八事まで全体がキャンパスだといっても過言ではない。それだけ広大なスペース全体にワイアレスLANの環境が整っているのだ。よって、ほとんどの学生はノートパソコンを常に持ち参している。日本の大学に戻ってきて一番驚いたことは誰もノートパソコンを持ち歩いていないことだった。UWの図書館はもはや読書をするというより、パソコンで調べ、文書を作成する

スペースとなっていた。論文データベースも充実しており、ど
の会社のもが入っているのかというレベルではなく、全部あ
るという状況だった。教員や学生は自宅からアクセスが可能な
ため、大変効率よく研究がおこなわれていると考えられる。大
学の規模について、補足するならば、たとえばUWには本学の
図書館を上回る規模のものが四〇はあるだろう。複数の総合図
書館に加え、学部別、分野別など、まさに想像を絶する。

日々の暮らし

ダウンタウンのアパートに住み、自動車で大学に通う。大学
にはほぼ毎日通った。熱心さをアピールするつもりは毛頭な
く、他にとりわけすることがないから大学に行く、ただそれだ
けのことだった。日本でもそうだが、土日のキャンパスは最高
だ。広大なキャンパスを独り占めしているようで実に気持ち
が良い。

アパートはかなり身分不相応のところを借りた。シアトルに
は日本のような狭いワンルームはほとんどない。少なくとも二
〇畳くらいはあるように思われる。しかし、さすがアメリカ広
くてよいというほど、簡単な話ではない。その分、家賃が高い
のだ。ダウンタウンから外れたあまり交通の便の良い所でも
も七〇〇—一八〇〇ドル/月くらいはしていた。しかもかなりの
年代物で安っぽい作りのものでも、それくらいはしていた。ま
た地震の少ない国ゆえか、たとえば七階ほどのアパートでも木
造で作られている。よって、かなり上下、左右の部屋の音に悩

まされるケースが多いようだ。私は大学から研究室をもらうこ
とができなかった。よって、読み書きの多くの部分を自宅でし
なければならぬと当初、思っていたので、なるべく静かな部
屋を借りたかった。となると、一軒家かもしくはさすがに木造
では建築できない高層アパートを借りるしかなかった、独り身
の私に一軒家の選択肢は現実味がなく、高層アパートとなった。
郊外に高層のアパートはあまりなく、結果、ダウンタウンの中
心に住むことになった。家賃は名古屋時代の約二倍となっ
てしまった。本当に痛い、大きな出費となった。しかし、部屋から
は海が見え、ダウンタウンのアパートにしては珍しく、ベラン
ダがあり、毎夜、おいしくたばこが吸えた。

ちなみに私の部屋はワンルームだったものの、全体としては
2LDKや3LDKが中心だった。ということ、かなりお金
持ちの人が住む、アパートだった。エレベーターのあいさつ
におけるあちらの第一声、「あなたの職業は？」、これがお金持
ちの世界なのか？ なかなか興味深かった。

ということ、高額の家賃を穴埋めするために、私は日々、
自炊に徹した。もちろん、一〇〇%日本食だ。ワシントン州の
アルバイトの最低時給は九ドルと日本よりもはるかに高く、そ
れが影響してか、サンドイッチなど、手をかけた食品はかなり
高い。もちろん、ハムやチーズなど、日本よりも厚く、その分
原価も高いだろうが、日本で二〇〇円程度で買えるものが、五
ドル程度で販売されており、結果、弁当も自分で作り、持参す
る日々となった。底が焦げた電気釜をもらってきて、毎回五合
炊きし、冷凍庫で個別保存する日々だった。ちなみに名古屋で

はミスタードーナツで夕食をとることが多かったため、食生活は日本にいる時よりも随分、日本ぽくなった。食料品の買い出しはダウンタウンのはずれ、チャイナタウンに所在する宇和島屋という日本食料品スーパーが中心となった。名前から連想できるとおり、戦前に愛媛県より移住してきた日本人により創業され、現在も経営されている。私が今まで使ったことのある海外に所在する日本食スーパーは狭くて汚いというのが常であったが、宇和島屋は日本の食料品スーパーと同程度ほどの広さがあり、しかもかなりきれいだである。価格は概ね日本の一・三倍程度と良心的である。お米は一〇種類以上あり、かなり充実している。こうしたお米は米国産のコシヒカリなどであるが、どれも日本と遜色なく、さらに日本よりもはるかに安い。また、調味料などでは、日本ではあまり見かけない日本メーカーの製品も数多く取り揃えられており、かなり低価格で販売されていた。味の素などにより席巻されている日本市場を回避し、こうした海外の市場で頑張る日本の中小食料品メーカーのたくましさがかがえる。

また、宇和島屋で私が最も感心したことは、そのサービスである。アメリカのスーパーはフレンドリーと言えば聞こえがいいが、ガラガラしている感が強い。しかし、宇和島屋では店員に日本人こそ少ないものの、アジア人が中心となり、日本のスーパーのようなてきぱきと丁寧なサービスが実践されている。もちろん、アメリカでそうすることのメリット・デメリット双方あるだろうが、日本式サービスを徹底させるマネジメント能力の高さに感心せずにはいれなかった。広く、きれいな店舗空間

において日本の商品を日本的サービスで提供する宇和島屋は日本人やアジア人のみならず、白人においても高品質の商品を購入できる場、異文化体験できる場として、高く評価され、愛されていく。シアトルにおける日本のイメージの向上に大きく貢献していることだろう。

英会話のお勉強

過去、一年つつ二回、英語圏で生活をしたことがあるものの、自分の英語能力は悲しいほど低い。そのため、今回のシアトル生活でも英語力の向上を目指し、その場を求めた。もちろん手っ取り早いのは、英会話学校に行くことだが、週五回通うとなると研究時間が大きくそがれる。また、月謝は一〇万円程度／月とかなり高額、クラスメートは二〇歳くらいの若者が中心でとても机を並べる気になれない（もちろん向こうはもつと嫌だろう）。ちなみにこうした学校において、以前なら日本人が圧倒的に多かったものの、現在では韓国人が席巻している。どこの学校も半数以上は韓国人学生とのうわさも聞いた。日本、韓国ときて、次は間違いなく中国だろう。ということで、法律スレスレの線ではあるが、移民者や移民希望者向けに英語を教えてくれる場に潜り込んだ。働いている者も多いため、夜間に開講されるケースが多い。参加者の年齢や出身国は多様で様々な国の話、移住した理由、現在の仕事など、興味深い話を数多く聞くことができた。英語が不自由な彼らの労働環境は当然厳しく、昼間、ホテルのベッドメイク、夜はレストランなど、二

つ以上の仕事を掛け持ちし、なんとか生活を支えている人が大多数であったように思われる。人間のたくましさ、対極にある日本人のぬるさを強く感じた。

また慈悲の心で外国人に英語を教えてくれる教会にも顔を出した。そうした志ゆえ、みなさん親切であったが、生徒の多くが日本人企業派遣者や研究者の妻であったため、当然ながら非常に居心地が悪かった。

さらに外国人に英語を教授する先生を要請する学校が、その練習台として生徒を募集しており、そこにも顔を出した。これは非常にうまくいって思った。私ひとり三人の先生がついてくれるなど、二〇ドル／三カ月で週二回と格安だったものの、王様のような気分を味わえた。自分としては英会話においてはこの場が最も有益だった。発音も一言ひとこと丁寧に直してもらい、おかげで幾度となく舌がつりそうになったが。

体を動かす

大学には非常に大規模なスポーツ施設がある。日本ではこうした施設を利用したことは全くないものの、現地の人間があまりにもストイックに体を鍛えているのにつられて利用を始めた。学生は無料、私はフアカルティメンバー同様の扱いで、一クォーター＝三カ月、一〇〇ドル程度であった。飛び込み台も併設されている大きなプール、筋力トレーニングの器具、バスケットやバレーボール用のコートなど、大変充実していた。私が特に利用したのはスカッシュのコートだった。日本では例え

ば名古屋に二面など、非常に限定されているため、こんな機会はなかなかないと思い、始めた。真つ白な壁に周りを囲まれての運動は奇妙な感じだが、なかなか興味深かった。私はとてもその域には達していないが、奥の深いスポーツではないかと感じた。それに何といつても、見た目がカッコいい（と自分では思っています）。

また、二〇年くらい完全に止めていたテニスも週一程度で行うようになつた。パートナーはジョージ。といっても、アメリカ人ではなく、台湾からの留学生で判事だ。しかし、彼をはじめ、台湾人や中国人や韓国人など、多くのアジア人が英語名を名乗るのに対して、なぜ日本人は日本の名前で通ずのだろうか（私も海外ではタカと名乗っています）。東京に行つても詛りを全く直さない関西人のように、日本人全体が実は我が強いのではないかとも感じる。話は逸れたがジョージは本当にいい人だった。いくら断つても許してくれず、何度も家と呼ばれ、ご馳走になつた。イギリスに居たときも、台湾人に同様のものなしを受けた。で、私の台湾人への印象はめちやくちやにいいのだ。小さな島国ゆえ、みんなで助け合うということが染みついているのだろうか？ 私は沖繩の人にも同様の印象を持っている。後に気づくのだが、実は奥さんも判事だった。それを知った時、全くそういう雰囲気を感じさせない彼らを強く尊敬した。彼は私より三カ月前に帰国したのだが、その際は使つていたステレオまでプレゼントしてくれた。その後、すぐに壊れてしまったが、その心遣いへの感謝はもちろん変わらない。

研究

アメリカに到着したのは四月一日だった。春クォーターは三月半ばよりスタートしており、途中参加するというのも何とも気まずいため、春は携帯電話端末のマーケティングに関する文献調査、店頭でのヒアリング調査を行うことに徹した。実際、文献を読んだり、論文を書いたりという作業は、主としてロースクールのライブラリーで行った。ビジネススクールのライブラリーは地元の大企業ボーディング社の支援を受けていることもあり、なかなか立派なものだったが、ビルゲイツの父親の支援を受けた（実際はビルゲイツであると思われるが）ロースクールのライブラリーにはかなわない。日本の研究室以上に立派なし字デスクにリクライニングの椅子がセットになった広いスペースがあり、研究室がなくとも全く何の不都合もなかった。むしろ周りの学生が一生懸命、勉強しているため、逆にいい刺激になった。また、気分転換を兼ね、カフェでもよく読み書きを行った。シアトルは何といてもスターバックス発祥の地であり、街中にカフェがあふれている。しかしながら、地元でのスターバックスの人気はそれほど高くはなく、シアトルにしかない地元のカフェのほうが好まれる傾向が強いように思われる。私もスターバックスは画一的で座席スペースも狭く、味もあまり特徴がなく、いま一つの印象を持っていた。もっとも、それはチェーンオペレーションの宿命だろうが。よって、地元にはかないカフェを好んで利用した。恐ろしいほどに広いスペース、一つ一つ異なる種類の椅子やカップ。そこには何の合

理性もないが、実に安らげた。日本人（アジア人全体がそうでしょうが）と異なり、カフェなどで大声をあげて話をする人は少なく、全体的に囁くように話す人が多い印象を受ける。また、私の英語力では隣席の話もよほど耳をすまし、集中しない限り、理解することができず、本当は年金がどうした、あそこの病院はなんとかなどの話をしているのかもしれないが（私がよく行く名古屋の喫茶店ではこうした会話が頻繁に聞こえてきて朝から生きる希望をなくすことがよくあります）、心地よい英語のBGMとなり、全く読み書きを邪魔されることはなかった。夏でも暑い日は少なく、雨の多い土地ゆえ、カフェでの読み書きは何ともいい気分浸れた。今、日本に戻り、最も悲しいことはこうした場がないことだ。ドトールで会社の愚痴にあけくれるサラリーマン、スターバックスで絶叫する女子高生、コメダで病氣や年金話に熱中する高齢者（非常に元気な声で）……んん。

夏からは講義に出席した。といっても、院の講義はほとんどなく、学部の講義を三つ聴講した。我々、客員研究員には当然のことながら聴講する権利はなく、個別に各教員にお願いしなければならなかった。しかしながら、どの先生も快諾いただいた。ただ、講義への大きな貢献として、積極的な発言を求められたため、胃が痛い日々が続いたが、今となってはいい思い出である。

夏休みということもあつてか、二〇名程度の参加者でまさに双方向の講義となっていた。かなりしつかりと書き込まれたシラバスが事前に配布され、指定されている教科書の部分を予習

してやるのが前提であり、講義では学生の発表や質問などが中心となつている。講義とはいへ、日本のゼミに近い印象を受けた。講義は本来こうあるべきだと強く実感した。また、よく言われることであるが、やはりアメリカの学生は積極的だと感じた。議論の質自体はそれほど高いとは思わないが、理解しようとする前向きな姿勢が印象に残っている。席も日本のように仲の良い友達同士くっついて座るわけではなく、各自、バラバラで、グループ分けなども、そばに座っている者同士であつたという間に決まってしまう。実にすばらしい（日本の学生と比較し、格段に大人な感じですよ）。

また、マーケティング関連科目を担当していたエド先生から、講義中に発表の機会を与えられ、つたない英語ながら携帯電話の研究について発表させていただいた。二〇歳前後の学生を前にした発表だったが、傍からは授業参観で父兄を前に頑張る小学生的ように映つたことだろう。

秋になり、MBAの講義を受講することができた。とりわけヘルベス先生のアントレプレナー（起業家論）とイノवेशョンに関する講義は興味深かった。ちなみに米国の経営学において、この二つのテーマが旬なようで、関連する科目が数多く設置されていた。この講義はアメリカのビジネススクールでおなじみのケースを用いた講義であり、指定されたケースをグループごとに分かれ、発表・討論するというスタイルであつた。ヘルベス先生の問題設定、議論の進行は実に見事で大変参考になつた。みなぎる熱意、周到な準備、大学教員としての誇りなどを強く感じた。

一方、残念だつたことは、学部国際マーケティングの講義を聴講していたのだが、こちらは二〇〇人ほどの大講義室で行われていた。アメリカの学生を大変評価していたものの、このスケールでは日本と全く同様、ざわざわした雰囲気であつた。この講義に出るたびに日本を思い出すほど、非常に類似していた。少人数教育の重要性を強く実感する出来事であつた。

冬学期は私にとって最後の学期となるため、無理を承知で四講義に聴講した。聴講といっても、当然のことながら予習をしてやる必要があり、各科目につき一〇〇ページ程度、目を通さねばならず、非常にきつかつた（本当に寝る暇がないほどでした）。夜間のコースも二コースあつたが、こちらは学生がマイクソフトの若手ではあるが管理職クラスが中心となり、本当にレベルの高い講義となつていた（教える教員の大変さが毎回、身にしみていました）。さらに、これらの講義とは別に、大学院のゼミにも参加させてもらったが、これも驚きだつた。毎週金曜日の八時から昼過ぎまで、毎回五本の論文をテーマに報告・議論が行われる。インド出身のスレッシュ先生の豊富な知識と経験にはただただ感心するばかりであつた。図や表を見て、時折「ビューティフル」とおっしゃるが、そういう境地に自分達は達することができないだろうなと感じる日々だつた。また、こうしたハードなゼミに毎回、食らいついている博士課程の学生も実に立派に見えた。こうしたことを五年続け、博士号を取得すれば、教員になつた時点でもかなり力が付いているだろうと思つた。

また、毎週金曜日には各コースごとにセミナーが実施されて

おり、どういふ運営になつてゐるのかはよくわからないものの、ハーバードやスタンフォードといった超有名大学の先生方の発表を聞くことができた。ただ、マーケティングに関して（マネジメントもおそらく同じ状況だと思われるが）、計量的手法を用いずば、それはもはやアカデミックなペーパーとはいえないという風潮が非常に強かつた（もちろん、それが絶対的に正しいとは思いませんが）。統計が全くできない私は英語コンプレックスにくわえ、統計コンプレックスにも陥つてしまつた。

乏しい先行研究、皆無の計量スキル、問題意識に対する覚悟、どれも子供と大人ほどの差があると痛切に感じる日々が続いた。何を問題として考察するのかという個別の問題ではなく、基礎的な研究マインドやスキルのなさに大きなショックを受けた（本来なら、これをバネに頑張らなければならないが、正直、まだそのショックから抜け出せていない状況です）。

マイクロソフト

夏の講義にゲストスピーカーとしてマイクロソフトでマウスやキーボードなど、コンピューター周辺機器の製品開発を行っているクリスさんが来ていた。日本大好きな彼と意気投合し、マイクロソフトツアーなるものを企画いただき、マイクロソフト本社にお邪魔した。彼らはそのエリアをキャンパスと呼んでいたが、緑に囲まれた敷地に建物（大体四階程度）が立ち並ぶ光景はまさにキャンパスといった感じだつた。試作品を作る工房から会議室、食堂など、隅々まで見せていただいた。一番の

驚きは入社したての若手社員を含め、全員が小部屋を与えられていることだつた。課長になつたら椅子に肘かけがつくという日本の大手自動車メーカーとは雲泥の差である（これは古い情報ですので、今はどうなつてゐるかわかりませんが）。

インタビュアーのお願いにも快諾いただいた。しかもインタビュアーだけでは面白くないので、日本のコンピューター周辺機器市場についてプレゼンしてほしい、それで情報交換ということにしようと思案され、必死に準備し、プレゼンを行った。次は自分の番ということで、ヒアリングを始めた。が、何も答えていただけない。その場に部長がいたのだが、どうやら土壇場で、ストップがかつたようだ（本当に悲しかった）。マイクロソフトの周辺機器は日本市場以外ではシェアで一位もしくは二位だが、日本では大きなシェアを保持できていない。部長はCOO、つまり日本人は日本製が好きなんだと断定していたが、私は卸や小売店との関係性の弱さではないかと感じてゐる。この点についてもマイクロソフトが協力してくれるなら、いくらでも考察を深めたいのだが……でも次回、日本でリサーチするときには必ず私のゼミの学生を対象とする約束してくれたので、期待して待ちたい。

UWの日本人…もう若くない自分

ワシントン大学ではたくさん日本人と会うことができた。お役人、ビジネスマン、弁護士、医者、研究者。なかでも自然科学系の研究者は私にとっては実に驚きだつた。ほとんどの人

がワシントン大学から給与をもらい、研究生生活を送っているのだ。もちろん分野の違いはあるものの、今の自分と比較し、はるか遠くにいることを痛感させられた。

さらにそれ以上にショックだったことは社会科学の研究者を除けば、私はどの集まりでも最年長だった。まだまだ若手気分だったが、実際の社会において自分はもう若くないことを実感させられた。自分は今からの人生でどれだけの研究ができるのだろうか？ 時間を大切に日々頑張らねばという気持ちにさせられた。

おわりに

ワシントン大学ビジネススクールへの在外研究という貴重な機会を与えていただいた先生方および関係者のみなさまに心から御礼申し上げます。ありがとうございました。